



東徳島福音ルーテル教会 41周年に寄せて

岸田 英理

1 好きな聖句

詩編 23 : 2

聖書には、鞭となってわたしを鍛え、杖となってわたしを支え励ます幾つもの御言葉がちりばめられているが、単純に「好きな…」で選ぶなら、詩編 23 編 2 節である。有名なダビデの賛歌だが、「わたしは乏しいことはありません」(1 節)、「死の陰の谷を歩むとしても、わたしはわざわいを恐れませんが、(4 節)というような強く揺るがぬ信仰があるわけではない。しかし、2 節の「主はわたしを緑の牧場に伏させ、いこいのみぎわに伴われます」は、読むたびに、一つのシーンが無意識のうちに思い浮かび、平安な気持ちで充たされる。ある病気を患ってからというもの、素足になることのないわたしは、常に足枷を課せられ、なんとも窮屈な思いをしているが、この一節に、肩の荷を束の間下ろし、ひんやりとした青草の上に、裸足で横たわり天を仰ぐ、なんともいえない心地よさを思い描くのだ。それは、幼いころ、無邪気にいつまでも裸足で蓮華畑を走り回り、くたくたになって、大の字に寝そべって大空を見上げたあの感覚であり、草の香しさまでもがよみがえってくる。そして、泉から滔々と湧き出でる水のせせらぎに耳をすませば、枯渇する魂を命の水の源「いこいのみぎわ」に誘われているような気までするのだ。



2 好きな讃美歌

きよき岸辺に (489 番)

ある日、学校から帰ると家に誰もいなかった。オルガンを弾いていたら、顔見知りのオジさんがやってきて「おばあちゃんが死んだ!」といった。「おっちゃん、冗談やろ?」と、いつもわたしを笑わせているばかりいる彼のいうことなど信じていなかった。しかし、連れていかれた祖母の家には、正座して涙している父の姿があった。祖母が 59 歳、わたしは 7 歳だった。心臓麻痺だった。3 月半ばの告別式には雪が舞っていた。20 歳になったば

かりの春、親友が北アルプスで遭難し、遺体で発見された。互いに関東の大学に進学し、はじめての春休みを徳島の実家で過ごし、東京の品川駅まで仲良く一緒に帰った僅かひと月後のことだった。長い闘病生活を送りながらも病床で仕事をこなし続けていた父は、ある薬の副作用で容体が急変し、当時、ニューヨーク・テロで騒然としていたアメリカより急遽帰国したが、最後を一人で看取った。平田篤胤の歌を詠んで「短い人生だった」といった。わたしのその時もそう遠くないと思うこの頃、物寂しいようで、愛する人たちと再会できる、それも神様の御元でと思うと、希望さえ湧き、神妙な気持ちになるのだ。

3 証し～2020

2020年6月、車椅子で到着した羽田ターミナルは、すべての店舗にシャッターが下り、薄暗くわずかな人影は、真夜中のLAXのようだった。長い通路を介助してもらい、ようやく乗り込んだタクシーは、黄昏時の横殴りの雨の中、首都高をスイスイとすすんでいった。車内の冷氣と間近に控えた都知事選に不満をもらすドライバーが、わたしを一層憂鬱にさせた。東京アラート解除を待ちわび、東京の家族の反対を押し切って決行したものの、慣れている単独行動も、こう身体が不自由では、なんとも心細いスタートだった。

不慣れな東京の病院ということもあり、診察当日だけでも付き添ってもらえる人を急遽探したところ、無宗教の友人が紹介してくれたIさんは、なんと聖職者だった。（以降、I先生と記述することにする。）通常なら多忙なところだが、コロナ禍で集会や礼拝説教もしていないからと快く引き受けてくださった。

初診日に、検査入院を勧められ、様々な手続きなどが一気にすすみ、一息ついたころには15時を回っていた。I先生は、青いバックパックから紙袋を取り出したかと思うと、「家内が漬けた非常に酸っぱい梅干し入りです。」とおにぎりを差し出してくださいました。中身が一つ一つ書かれ、とても形よく丁寧に握られたおにぎりは、佐藤初女の「おにぎりの祈り」を思い出させた。梅干しといえば、はちみつ入りの甘いのを好んで食べていたわたしだが、入院中、辛かったり、挫けそうになった時に院内のコンビニ、帰徳後も折にふれて、その非常に酸っぱい梅干しを探しては、あの特別なひとときを思い出すのだ。

I先生は、初診のみならず、状況を判断して、入退院にもサポートを申し出てくださった。入院日には、スーツケース二つと、膝にリュックとバッグを載せた車椅子のわたしを同時に「ヨイショ！ヨイショ！」と運び、どんなにか大変だったろうに、大粒の汗をぬぐいながらとてもニコニコしていた。そして、寝たままでも必要なものに手が届く補助具まで「これあると便利ですよ。」と置いていった。それは、彼自身が、人工関節手術を受けたときに使用したものだった。入院中、外部からの訪問者は禁じられていたが、I先生は、

翌日も、奥様手作りの梅干しを携え、グルテンフリー食事療法をしているわたしの調味料を持ってきてくださった。

さて、肝心の検査や診断は難航し、病棟担当医ともギクシャクし、尋ねたいことも尋ねられないままモヤモヤと過ぎていった。そんな中、信頼していた近親者との不和、コロナ禍による仕事上の難題まで持ち上がり、療養どころか心休まる間もなかった。僅かな希望を支えに、必死の思いでここまで来たのに、こんなに頑張っているのに、どうしてわたしばかりこんな目に遭うのか、11階の病室から見えるスカイツリーもただ空しかった。虹色に点滅するライトを呆然と空虚な気持ちで何時間も眺めていた。東京に引っ越した友人が、東京の夜空は寂しいといていたことを思い出した。とても悲しいのに、患っている疾患（ドライアイ）のせいで涙も出ず、思いつきり泣くことすらできぬことがわたしを一層悲しくさせた。

そんな中、翌日の回診時に、やはり滅多にないチャンスと思い直し、もう少し詳しい説明を聞こうとしたところ、病棟の主治医は、突然、怒り出したように医学用語をまくしたて、慥然と立ち去ってしまった。近親者にも医師にも見放されたように見え、人を不快にさせたり、苛立たせる要因がわたしにあるのだと落ち込んでしまい、癒しを求めて上京したのに、あまりにも惨めで情けなかった。すると、しばらくして、主治医と同席していた研修医が病室に戻ってきた。主治医との会話が噛み合っていなかったので、補足説明をしたいと申し出てくださったのだ。専門医ではないけれど、という前置きのもと、順序だててとても解りやすく説明してくださった。わたしも、家族の事情、東京にも拠点があることなどを話しているうちに、彼は、徳島のわたしの主治医の教え子であることがわかった。さらに、クリスチャンであること、なんと東徳島ルーテル教会にも来られていたことまでわかり、そして、「一緒に祈りましょう」とお祈りをリードしてくださったのだ。

また、彼は、わたしの話を聴くだけではなく、病棟の主治医が、上司に相談して、退院後の受け入れ先をみつけようと努力していることも教えてくださった。いくつかの医療過誤やパワハラを受けた経験から、医師に対して怖れや不信感を抱いていたことも否めず、その後、なんとか主治医と良好な関係を築こうとしたが、退院前日まで心を通わせることはなかった。しかし、退院日に、「貴女ならわかってくれると思って、医者種の明かしをすると、いろんな検査もしてあげたかったけれど、広げ過ぎてはいけません。（そういう判断基準のトレーニングを受けているらしい）」そう言って、病室のわたしが書いた貼り紙“一度にひとつ。大切な方を選ぶ！”（これはI先生からのアドバイスだったが）を指さし、「いい言葉ですね」と付け加えて、去っていった。

それから間もなくして、ニコニコしながらI先生が迎えに来てくださった。帰り道に、病

院に来るたびに車を置かせてくださっていたというテモテ教会、そして、彼の母校の赤門を案内して下さった。（残念ながら、コロナ対策で教会およびキャンパス内には入れなかったが…。）帰宅するや否や、I先生はわたしを休ませたかと思うと、わたしの自転車で、当座の食料品を買い出しに行き、指先が不自由で大変だろうとジャガイモの皮まで剥いて下さった。また、聖書のお話もして下さった。しばらく礼拝に参列できず、ライブのお説教を聴いていなかったし、それが土曜日だったこともあり、安息日の先取りをしたようでとても嬉しかった。

マルタとマリアの話だったが、なぜかその時、わたしはイエス様の洗足のシーンに想いを巡らせていた。言葉にしたわけでもないのに、I先生の数々の行き届いた配慮に、「仕え」とはこういうことなのか、近親者でさえそっぽを向く中、見ず知らずのわたしのために、どうしてここまで手となり足となって働いてくださるのか… ああ、これこそが主のために仕えるということなのかと黙想していた。

羽田へ発つ朝も、収集日より一日早いけれどゴミを出そうとしていたら、それさえも持ち帰って下さった。道を間違えたおかげで、お台場界限もドライブし、搭乗口まで見送って下さると仰ったが、ターミナルの入り口で車から降ろしてもらった。車椅子ではなく、一人でゆっくりと、一步一步、しっかりと確かめるように歩いた。機内で少し晴れ間も見えたが、徳島阿波踊り空港に到着すると、行きと同じように雨が降っていた。タクシーの運転手が、「徳島でも若い女性のコロナ感染者がでてな…」とぼやいていたが、上の空だった。今度は、これから始まる塾居生活のことで頭がいっぱいだった。

カギを開けて部屋に入り、重いバックパックを下した途端、へなへたと全身の力が抜け、ベッドに崩れ落ちてしまった。しばらくして起き上がると、食卓の上に、夕飯の松花堂弁当が置かれているのに気付いた。蓋をとると、焼き魚、野菜の煮物、酢の物、フルーツ、etc. そして御飯はハート型にくりぬかれていた。冷蔵庫にも当面の食料品、また、冷凍庫には大きなおにぎりが窮屈そうに入っていた。お鍋に用意されたお味噌汁を温めながら、テレビをつけると、東京都知事に再選を果たした小池さんが、他県への移動自粛要請を発表しているところだった。

「ホビットの冒険」や「指輪物語」のフロドのような手に汗握る展開だった。東京アラート解除から再自粛要請まで、限度いっぱいタイミングだった。始終、不安や怖れ、緊張感で疲労困憊していた。結果だけを見て、それみたことか、無駄なことをして徒労に終わっただけではないかと、心ないことも言われた。確かに、わたしの望んでいたことは与えられなかった。でも、中島みゆきの歌の文句（「戦う君の歌を戦わない奴らが笑うだろう」）ではないけれど、誰にもわかってもらえなくても、格闘したわたしと神様だけがご

存知のなんとも不可思議な冒険をしたように思っている。

信頼していた人たちからの迫害に（詩編 41：9）、滅びる羊のようにさまよい（詩編 119：176）、重荷を下ろしたいと切望し（マタイ 11：28）、助けを求めた（マタイ 7：7、ヤコブ 1：5）。I 先生、研修医の先生、上京中にお世話になった家政婦さん（マタイ 7：12）、再発癌で闘病中ながら励まし続けてくれた友人、10年間もお稽古に行っていないのに交信を継続していた師匠の支え（偶然にも入院先の病院の近くに住んでいた）、徳島で、神戸で、東京で、アメリカで、フィンランドで祈り続けてくれた兄弟姉妹たちが、「もう無理です」とビルボのように倒れ伏したわたしに、その都度、一杯の冷たい水を差し出してくれた（マタイ 10：42）。いつも御言葉がともにあった。弱りきった羊に、隠れたところにいる神様が憐れみをかけてくださったと思うのだ。

しかしながら、問題が解決したわけでもなければ、元来、心頑なで、疑り深いわたしは、この一連の出来事をまだ咀嚼している最中だ。パウロのようにわたしには棘が与えられている。わたしが願い求めるような身体の癒しはないだろう。実生活でも足がよろめいては、しょっちゅう躓きそうになるように、わたしの船は今にも転覆しそうだ。目も口も、手も…、頭の前からつま先まで、かなり不自由になり、この見通しの悪い中、どうやって舵を取り続けるというのか？怖れや心細さ、疑いに取り囲まれると、平安を求めても、心の安まるときは少なく、希望を見いだせず、うなだれるばかりだった。フロムは「愛すること」（2020）の中で、将来的に確実なことが一つある、それは「死」であるといっているが、ビルボには、命がけで指輪探しという旅の目的があったが、わたしが死に至るまで存在する理由は何なのだろう？神様のなさる御業は、わたしには皆目見当もつかない。しかし、それこそが神の秘儀であり、時宜に違って一つ一つがやがて繋がり、神様の御計らひだった、益としてくださったと判る時がくるのだろうか？

幼いころ通っていた教会の入り口に「あなたの若い日に、あなたの創造主を覚えよ。」（伝 12：1）とあったが、2012年10月に受洗するまでの長い年月、そして受洗後の8年間の自らの信仰の歩みを省みると、不信仰の極みに尽きる。東京での偶然とは思えない出来事を体験しながらも、半信半疑なのである。そんなわたしの書く証しであるから、なんとも頼りないのだが、子供のころから終始一貫して変わらないことがある。それは、「我」と「汝」の関係だ。いつも何かに疑問を感じては、「わたしはどうすればよいのだろうか？」と、見えぬ相手に問うては答えを探し、また、時には「汝はどうするのか？」と問われ続けていたが、この霊的な交わりは、この世に生を受けた時から始まっており、離れたことがないのだ。

わたしには高齢の母がいるが、病身のわたしに「代われるものなら、代わってやりたい」

が口癖だ。親なればこそその有難い言葉だが、身代わりといえ、イエス・キリストの十字架の血潮をおいてほかない。贖い主であり、慰め主であり、唯一無二の救い主である。

「わたし」の闘いの旅はこれからも続く。わたしにとって、「生きる」ことは主のためというより、獄中書簡の中でパウロが述べたように、「生きることはキリスト」（ピリピ 1:21）、主と一体となって、わたしにしか担げない十字架を背負って生きる、それこそが、主から与えられた恵みを示す「証し」であり、主を崇めることなのだと思う。わたしの足がよろめくたびに、主の慈しみが支えてくださり（詩編 94:18）、命のある限り、恵みと慈しみが追ってきてくれる（詩編 23:6）に違いない。

最後に、この41年という東徳島福音ルーテル教会の軌跡に携わり、主なるイエス・キリストと共に闘い続けた先達の命の代わりに、そして、この心貧しき者が、そのしっかりとした変わる事のない大きな幹に連なる一枝として数えられており、フロドに旅の仲間がいたように、同労者である兄弟姉妹たちを神様の家族として与えてくださったことを心より感謝したい。また、このつたない「証し」を読まれたまだ見ぬ兄弟姉妹たちに、わたしのような自分の信仰に自信を持たない者が、神様の恵みと憐みによって生かされ、このように弱い者が用いられ、たった一つの大切なものを伝えられたなら幸いである。



松花堂弁当

4 コロナ禍における信仰

41年にわたる東徳島福音ルーテル教会の歩みにおいて、いま起こっているような禍がわたしたちの身に降りかかろうと、誰が予想しただろうか？聖書の中にも先が見通せない時代に生きた人々の物語が語られているが、わたし自身、様々な喪失感や絶望感にあえぎ苦悩しながら、クリスチャンとして生きる意味をコロナ禍中に考えさせられた。その一例として、コヘルトのことばの中に与えられた気付きを、この41周年記念に神様の家族と分かち合いたいと思う。

コヘレトは言う。空の空。空の空、一切は空である。「空」（くう）をヘブライ語では「ヘベル」というそうだが、旧約聖書全体で73回、コヘレトの書には38回でてくるそうだ。「すべてが空しく、風を追うようなものである」、「私は人生をいとう」、「すべてのことが人を疲れさせる」など、生に対して悲観的というか虚無的、否定的な記述が多い。

わたしも、この数年、稀な疾患に苛まれているが、絶望の淵を通りながら、起き上がれなくなつては、どんな険しい崖にも必ず休める処があると信じ続けてきた。「タリタ・クム」とまじないのように主の御声を想像し、倒れ伏しては起き上がり、困難を克服できずとも、受け入れ耐え忍んできたつもりだが、今年ばかりは、世界がコロナで騒然としている最中に、更なるいくつもの特定難病疾患が見つかり、絶句するほかなかった。神様にしか診断できない病だと医師たちが口々にいった。治療のめどもたたないまま、新たな疾患が次から次へと見つかっていく八方塞の中、「主は与え、主は奪う」（ヨブ記1：21）に続く、「主の御名をほめたたえられよ」という境地に、このような状況ではどうしても至らなかった。

どうしてわたしの望まぬことを神様はお与えになるのだろうか？わたしの人生は耐え忍ぶことのみなのか？わたしの魂は生ける神を求めて渴いていた（詩編42：2）。問うてみても、沈黙する神様に、すべてが空しく思え、生きている意味を見出せぬまま日がな一日を過ごしていた。しかし、世界レベルのコロナウイルスの蔓延は、免疫疾患という持病があるわが身に置いて、健常者よりリスクが高いけれど、誰しも明日のことなどわからないという点において、有限の身であることは平等なのだ。

前述の「ヘベル」には「空しい」のほかに「束の間」という意味があるそうだ。コロナ感染への怖れや不安の中で、わたしたちは「メメントモリ」（死を覚えよ）、死を一層身近に覚えるようになったのではないだろうか？生と死が表裏一体でつながっているからこそ、「束の間」だからこそ、終わりある人生だからこそ、今日を生かされている喜びがあるのかもしれない。では、先行きがわからない中で、「いま」をどう生きればよいのだろうか？不条理とも思えることを幾度も経験しながら、「いま」をただ耐えるだけの通過点と思って過ごしてきたわたしは、「神様、わたしはどのように生きていけばよいのでしょうか？」と、そう問い続けてきた。「明日」がわからないというのに、どう「いま」を生きればよいのだろうか？

小友聡師は、「それでも生きる」（NHK出版2020年）の中で、フランクルの次のことばを引用している。「人間とは生の意味の問いを発すべきものではなくて、むしろ逆に人間自身が問いかけられているものであって、みずから答えねばならぬ。」そういえば、ヨブ

記でも主への問いかけに、主はコペルニクスの転回で応じた。神様の御業は真に謎、秘儀である。神様に問うばかりで、答えがみつからない苛立ちから自己信仰に陥っていたわたしだが、「神に問う」ことよりも「神に問われている」ことに気づかされたのだ。答えるのは、この「わたし」のほうなのだ。

同様の逆説例として、小友師は、「死ぬ日は生まれる日にまさる」（コヘレト 7 : 1）を、「死という終わりから生を考えよ」、「生は死から意味を与えられる」、「死があるからこそ、生の意味がある」と解説している。「生きるより死んだほうがまし」なのではなく、その日が来ると意識することによって、人生が終わることをきちんと受け止められる、「いま」がどんな状況であっても、あなたは命をあたえられているではないか、だから、何があっても生きて、生きて、生き抜いていけと、この人生に否定的ともとれる御言葉を励ましのことばとして解いている。

朝にあなたの種を蒔け 夕方にも手を休めてはいけない。
あなたは、あれかこれか どちらが成功するのか、
あるいは両方とも同じようにうまくいくのかを知らないのだから。

(伝 11 : 6)

人間には未来を知ることがかなわない。無駄なことをしているのではないかと思う時がある。すべてが空しく感じる時がある。でも、空しいから諦めるのではなく、空しく、先が見えないからこそ、いま、最善を尽くすほかないのだ。「人生はへベル」束の間なのだ。その束の間を「あなたはどう生きるのか?」、コロナ禍の中で、神様にそう問われている気がする。逆境の中で、わたしたちは、「いま」という「束の間」に目の前で起こっていることに心を奪われ乱されながら、すべてが神様から出て、神によって保たれ、神に向かっている（ロマ書 11 : 36）ことを知らされているクリスチャンとして、創造主の御元に立ち返るチャンスでもあると思う。一人一人が各々の闘いの場において、心を鎮め、この束の間に思い、願い、祈り求め続ける中に、真のインマヌエルの主に出会うことだろう。

「わたしは世の終わりまで、いつもあなたがたと共にいる」（マタイ 28 : 20）

